

蔦の教会

日本聖公会

川越キリスト教会

〒350-0056 川越市松江町 2-4-13 (牧師) 司祭 パウロ鈴木伸明 ☎049-222-1429 FAX049-222-2056
http://www.kawagoe-seikoukai.org/ (編集) 文書部 ルカ 野澤 達也

2021年度宣教テーマ 「わたしの家はすべての民の祈りの家(聖書) —煉瓦の聖堂100周年—」

遠方からの指定献金と礼拝堂

パウロ・ドウエル・ベリー

はじめはマキム主教からの要請

1893(明治26)年3月の川越大火で、川越基督教会の初めての礼拝堂は全焼した。同年の12月に瓦ぶき木造平家の礼拝堂が同じ敷地(現川越市元町1丁目 札の辻より30メートルほど東)で再建された。仮設礼拝堂のもりだったが、13年経った頃、1906年10月号のスピリット・オブ・ミッシェンズ(米国聖公会内外伝道協会の月刊紙。内容は各地よりの伝道報告事項や伝道を進めるための指定献金などのお願いや)にマキム主教が川越のポロポロになってきた仮設礼拝堂を建て替えるために五千ドルの募金をお願いを執筆した。当時の日本聖公会東京地方部は東京から青森県までの広さであった。川越基督教会をあわせて、優先的に同地方部6つの教会の土地手配や建て替えのための募金である。日本の広い地域の伝道活動のための募金なので、一般の米国聖公会信徒は指定献金をしたい気持ちがあっても、どんな事業を援助すれば良いのかお手上げの気持ちもあったかも知れない。実際に川越の新礼拝堂のための指定献金はあまり無かったようである。川越の場合、土地はあると

書いてあったので、1906年当時の仮設礼拝堂の土地で建て替える考えのようだった。当時、川越基督教会

はまだまだ金銭的な自立になっていなかった。礼拝堂建て替え用の信徒指定献金が不足していた。もしその頃の米国聖公会伝道内外協会よりの定期的な援助などが無かったら川越基督教会の運営はとて難しかったと考えられる。1921年に東京地方部での金銭的な自立ができた教会はやっと6つになり、前年より4つ増加したそうである。1908年9月号のスピリット・オブ・ミッシェンズにマキム主教が改めて川越礼拝堂建て替え指定献金をお願いを執筆した。効果は少々あり、同年の11月号から1910年11月号までの2年間の指定献金の3件がようやく入り、合計75ドルになったが、必要の一万ドルのごくわずかであった。

田井司祭、宣教師からも要請

1913年10月号のスピリット・オブ・ミッシェンズに川越基督教会の田井正一司祭と、1904年秋から1908年春まで川越基督教会で活躍したキャロライン・ヘーウッド宣教師の両人が改めて、川越基督教会の礼拝堂建て替えるための募金をお願いを執筆したが、指定献金が思うようには集まらなかった。わが教会の保管された資料では1916年

4月聖堂建築指定献金予約簿や1919年7月払込高は信徒の3年間の指定献金の額は、3年間で実際入金高352円、予約金の1130円に對してもわずかであった。

現松江町2丁目の敷地購入のために、1908年春から4年ほど川越基督教会で活躍したエリザベス・アプタン宣教師やクロティルダ・マータン女医の500円の寄付が入り、米国内外伝道協会は不足分二千円を支出し松江町2丁目の245坪位の敷地購入ができたようである。

立教大学立教学院史資料センターは以前、米国聖公会アーカイブにある日本関係史料を取得し、中に百年ほど前の米国内外伝道協会のウッド幹事と東京地方部のマキム主教の貴重な2通の手紙を大江満教授や宮川英一助教授から紹介していた。この手紙から現川越基督教会の礼拝堂予算の大部分は大勢の米国聖公会信徒からの指定献金だと判明した。

マキム主教からウッド氏への手紙

1920年1月27日
マキム主教から米国内外伝道協会ウッド幹事へ 「川越教会のお金は必要な時に送ります」という電報を受け取って、とても嬉しく思っています。先週の土曜日、1月24日にライフスナイダー博士と、池袋のウィルソン氏(ニューヨーク市マリー・アンド・ダナー建築設計事

務所の関係者。同事務所は日本聖公会の立教大学や熊谷教会や川越教会の煉瓦建築を設計した)の下で建設技師をしていた五十嵐氏と共に川越に行きました。私たちは熊谷の礼拝堂の設計図を持参し、田井老師に見せたところ、喜んで、自分の礼拝堂も同じようにしたいと言っていました。

熊谷の礼拝堂は、約1万1千円もしたことを覚えておられるでしょうか。川越では1万5千円以下では建築することはできません(当時のインフレは激しかったようである)。

私たちの手元には、アメリカからのこれまでの指定献金を含めて、約4千円の資金があります。(後、ポロポロの礼拝堂の土地売却金の1千円も新礼拝堂建設資金にもなった)

十分な資金があることが分かったら、一刻も早く建設を始めたいと思います。親愛なる田井は、長年の祈りがかなえられたと聞いて、喜びの涙を流しています。

私は、彼が私たちの元を去る前に、礼拝堂が完成することを望んでいます。彼はあなたが見たときから老衰はかなり進んでいます。

ウッド氏からの返信

1920年3月26日 米国内
外伝道協会ウッド幹事からマキム主
教へ 1月27日付けのお手紙にお答
えして、3月15日に川越教会建築資

金として4593・46ドルの信用状をお送りしました。その後、マサチューセッツ教区から1千ドル追加で入金されました。手元にあるのは約4千円と伺います。私たちは9千186円を送りました。(当時の外国為替相場は1ドル12円位のようにあった)マサチューセッツの1千ドルはそれに2千円を足します。これは必要な1万5千円を大きく超えると思います。

また、教会建築基金に少なくとも5百ドルの寄付を申請されたと聞いています。従って、川越教会は十分な配慮がなされているように思われます。熊谷の礼拝堂のようなものが川越にあれば、非常にうまくいくと思います。私はただ、聖別式に立ち会うことができればと思うだけです。すべての願いを込めて。

ピーターソン氏の大きな貢献

ウッド幹事の添付資料は米国聖公会信徒より川越基督教会新礼拝堂建築用の指定献金の1919年1月1日から1920年3月11日までの明細。まだスペイン風邪のパンデミック最中でも、合計は4千593・46ドル。ニューヨーク市立大

学数学教授のフレデリック・ピーターソン教授夫妻の働きは大きいようである。例えば次の通りである。

(1) その頃、ピーターソン教授は

内外伝道協会のボランティア出張講話すテーマは「日本での伝道」。

(2) 以上の4千593・46ドルの指定献金はほとんどピーターソン夫妻住まいのニューヨーク州や隣接州よりである。

(3) 1部の指定献金はピーターソン教授より、あるいはピーターソン氏関係者よりと明確に書いてある。

1921年度の東京地方部マキム主教の米国聖公会内外伝道協会への報告書に「川越で長い間祈願されていた新礼拝堂は、1921年、復活祭後の第2日曜日(4月10日)に大勢の信徒の前で聖別され、川越で最も魅力的な建物となった。(参考1918年「第八十五銀行」11埼玉りそな銀行旧川越支店が落成した)。30年ほど前に日本聖公会で初めて按手を受けた田井司祭は、「ヌンク・デイミツティス(シメオンの賛歌)」を歌う準備ができていたと言っていました。その後、気が変わり、礼拝堂を埋め尽くすほどの信徒ができるまで川越基督教会で残りたいたと言っています。

ピーターソン夫妻の川越訪問

1925(大正14)年5月、ピーターソン教授夫妻は川越を訪問した。目的の1つは自分の目で2人の援助活動がどのように生かされたかを確かめたかったかと思う。ピーターソン



ン教授夫婦の世界汽船旅行の最後の訪問先だった。1924年12月10日ニューヨーク市出発、大西洋を渡りヨーロッパ、中東、インド、東南アジア、ホンコン、中国の順で、最後に日本にきた。1925年6月1日、カナダのバンクーバー着。

またピーターソン教授1947年没後、奥さんは川越基督教会へ1千ドルを寄付した。(当時の為替レートは1ドル1360円)1949年に通称「ペターソン館」が礼拝堂に隣接されて建築され、戦後の園児急増時に開かれた初雁幼稚園第一分園の保育室としても使われた。ピーターソン氏の没後、奥さんは教授が日本聖公会の5つほどの礼拝堂の建設支援をしたことを書き記した。